

# 衛生立国をめぐるって 作家 佐野眞一



(1947— )

ノンフィクション作家。東京都生まれ。早稲田(わせだ)大学第一文学部卒業。出版社勤務を経て作家となる。1982年(昭和57)日本のセックス産業を取材した『性の王国』で注目を集める。1987年『業界紙諸君!』で、とすればブラックジャーナリズムとも親和性をもつ業界紙について、その現場を取材し、最底辺から見たジャーナリズム論を展開。1990年(平成2)、三行広告を入口に、社会をルポルターージュする『紙の中の黙示録』を発表。こうした、いままでジャーナリズムのメインストリームとは目されなかった部分に注目してジャーナリズムを考えるスタイルは、スタートのころの佐野が、出版界の周縁に位置するところで『怪獣怪人大百科』など子供向け娯楽本の制作にかかわっていたことに根ざす。こうした問題意識は、出版不況の現場をドキュメントした『だれが「本」を殺すのか』(2001)に受け継がれる。出版業界のさまざまな現場を歩き、生(なま)の声を集めたこの仕事は出版界内外を震撼(しんかん)させた。

最近訪れたトルコで感じたことがあります。カッパドキアやエフェソスなどの遺跡群は素晴らしいのに、トイレに入って少しがっかりしたんですね。お世辞にもきれいとはいえない。これはトルコに限ったことではありませんが、海外に行くと日本がどれだけ衛生概念が発達した国であるか痛感させられます。

近代化は、衛生思想の普及と切り離せない関係にあるといえるのではないのでしょうか。そして、近代日本における衛生思想は、北里柴三郎、後藤新平、長与専齋による功績が大きいです。三人は内務省衛生局に勤めていました。僕は以前から後藤新平について調べているのですが、今日は彼らの関係から現代の日本に必要なとされる人間像について話したいと思います。

後藤新平は1857年に岩手県で生まれました。医師を志し、26歳で内務省衛生局に採用されます。そのときの局長が長与専齋でした。長与専齋は岩倉使節団に同行し、日本に「衛生」という言葉を広めたといわれる人物です。

その後、後藤新平はドイツに留学し、同じく衛生局からドイツ留学を命じられていた北里柴三郎と出逢います。この時期、二人は互いの実力を認めようとせず、敵対し合っていました。

帰国した後藤新平は、長与専齋から衛生局長を任命されます。一方、北里柴三郎は長与専齋と福沢諭吉の協力を得て伝染病研究所を創設し、志賀潔や野口英世ら多くの偉人を世におくり出しました。その後、伝染病研究所が内務省から文部省に移管されたのに反対して所長を辞任し、北里研究所を設立しますが、このとき多くの後輩が北里を慕ってついてきたといえます。「雷おやじ」のあだ名を持つ北里ですが、人柄が大変よかったです。

後藤新平との関係はどうなったのでしょうか。反目していた二人ですが、次第に認め合うようになります。立場は違っても、日本を衛生立国にしようという思いは同じだった。だからこそ、互いを理解しあうことができたのです。

葛藤や離合集散を繰り返すなかで人間関係が掲載され、一つの社会がつくられていく。この先の日本を考えたとき、彼らのように広い視野と大きな器を持った人間が必要とされていくのではないかと思います。

参考

長与専齋

肥前国大村藩(現在の長崎県大村市)に代々仕える漢方医の家系に生まれる。大村藩の藩校である五教館(長崎県立大村高等学校の前身)で学んだ後、安政元年(1854年)、大坂にて緒方洪庵の適塾に入門し、やがて塾頭となる(福澤諭吉の後任)。のち大村藩の侍医となった。文久元年(1861年)、長崎に赴き、医学伝習所にて、オランダ人医師ポンペのもとで西洋医学を修める。その後、ポンペの後任マンスフェルトに師事し、医学教育近代化の必要性を諭される。

明治元年(1868年)、長崎精得館の医師頭取(病院長)に就任。明治維新により同館は長崎府医学校(現長崎大学医学部)となったが、マンスフェルトと共に、自然科学を教える予科と医学を教える本科に区分する学制改革を行った。

明治4年(1871年)、岩倉遣欧使節団の一員として渡欧し、ドイツやオランダの医学及び衛生行政を視察した。明治6年(1873年)に帰国。明治7年(1874年)、文部省医務局長に就任。また東京医学校(現在の東京大学医学部)の校長を兼務。同年、東京司薬場(国立医薬品食品衛生研究所の前身)を創設した。

明治8年(1875年)、医務局が内務省に移管されると、衛生局と改称して、初代局長に就任。コレラなど伝染病の流行に対して衛生工事を推進し、また衛生思想の普及に尽力。「衛生」の語は、Hygieneの訳語として長与が採用したものである。